

論文

ポライトネスの観点から見た英語のアイロニー
—否定的評価を婉曲的に伝達する言語表現として—

言語教育研究科 英語教育学専攻
博士前期課程2年
秦 大地

Abstract

アイロニーとは、否定的評価を婉曲的に表現していると見做された言語表現である。つまり、アイロニーの中心的な機能は自他のフェイス保護機能である。このことから、あえて遠回しな言い方をする動機が説明されるとともに、アイロニーに非対称性が存在する理由や、アイロニーを言うにあたってそれがアイロニーだと明言してはならない理由も説明される。さらに、アイロニーが婉曲表現であるという議論を受け入れると、アイロニーは直截的な非難・嘲笑と較べて攻撃性が緩和されていると考えられる。また、以上の論点から、態度衝突とアイロニーが似て非なる表現であることが詳らかにされる。

キーワード：アイロニー／評価／フェイス／婉曲性／共通基盤

1. 序論

多くのアイロニー¹⁾研究は〈アイロニーとは何か?〉という本質についての問いを発しつつ、収集した実例の特徴から帰納的にその問いに答えようとしてきた。しかし、そのサンプルの選定は研究者の判断に委ねられることが多く、客観的とは言えないものであった。また、昨今流行りの、コンピュータを用いたアイロニー検出においても、そもそものプログラム設計の段階で、何がアイロニーであり何がアイロニーでないかの判断は、結局はプログラマーの主観に委ねられている。つまり、アイロニー研究においては、各々が思うアイロニー観を補強するための、循環論法的な議論がなされることが多い。したがって、アイロニーを研究する上での方法論について今一度省察する必要がある。

たとえば、人称的な観点からこの点を問えば、アイロニーの発話において、話し手／聞き手／第三者のうち、誰がもっともアイロニーの決定者としてふさわしいのだろうか。それとも、全知全能の神にしかそれは決定しえないものなのだろうか。あるいは、仮にアイロニーに決定者がいるとして、その決定権は誰か一人が有しているものなのだろうか。そ

れとも、アイロニーか否かは多数決で決まるのだろうか。このように考えたときに、〈アイロニーとは何か?〉という問いと〈これはアイロニーか?〉という問いとの間の隔たりが意識されるだろう。本稿は前者の問題にアプローチする。具体的には、あえてその表現を選択する動機に着目しつつ、演繹的に表現手法の分類を行なう。そのためには、まず言語をいかなる視座から眺めているのかが提示されねばならず、その上で、類概念との比較によってアイロニーを規定しなければならない。

結論を先取りして言えば、本稿では、Barbe (1995) や Garmendia (2010, 2018)、あるいは Leech (1983, 2014) の議論を敷衍しつつ、アイロニーを〈否定的評価を婉曲的²⁾に表現していると見做された言語表現〉と定義する。この結論を導き出すために、以下ではまず、アイロニーが評価的発話であることを論じる。次に、婉曲性により、話し手の意図について聞き手はあくまで推論をすることしかできず、それゆえ確証を持つことができないことが議論される。これは先述の定義における「婉曲的」「見做された」の箇所該当する。つまり、本稿の議論は、〈アイロニーは、それがアイロニーであるかを誰も完全には決定できないからこそ婉曲性を有する〉と要約しうる。以上の議論から、アイロニー論においてしばしば問題となってきた〈なぜあえてアイロニーを言うのか〉〈なぜアイロニーには非対称性が存在するのか〉〈なぜアイロニーを言うにあたって、それがアイロニーだと明言してはならないのか〉〈アイロニーは直截的な非難と比べてきつく感じられるのか、それとも批判の度合いを弱めるのか〉という4つの問いにも回答が与えられる。

2. アイロニー論小史

Attardo (2000) は、20世紀までに提出されたアイロニー論は2種類に大別されると述べている。1つは、〈本心とは反対のことを言うこと〉をアイロニーの中核と見る伝統的理論やグライスの理論と、それよりも広範な〈本心とは異なることを言う〉を定義に用いているアイロニー論のグループである。これらに共通しているのは、本心を別様に表現しているという特徴である。これをさしあたり、転義としてのアイロニー観と呼ぼう³⁾。もう1つのグループには、先行する発話の反復や、一般的に想定されている期待への言及をアイロニーの典型例とするエコー理論⁴⁾や、愚かな人物のふりにアイロニーの本質を見る擬装理論などのアイロニー論が割り当てられる。こちらのグループの特徴としては、発話の責任を他者や過去の自分、あるいは世間など、現在の自分以外の者に帰属させている点が挙げられる。これをメタ・メッセージとしてのアイロニー観と呼ぼう。

アイロニー論の歴史的展開としては、転義としてのアイロニー観からメタ・メッセージとしてのアイロニー観への変遷が指摘できる。その転換の中核には、〈発話源としての他者〉が観点として取り入れられたと要約できよう。しかし、この転換を経てもなおアイロニー論には問題が残積していた。特に、〈なぜあえてアイロニーを言うのか〉という問いには、上述のいずれの立場も十分な説明を与えることができなかった。

そこで、1980年代後半以降は、アイロニーのコミュニケーション上の機能が考究される

こととなった⁵⁾。とりわけ、アイロニーが否定的評価の伝達を意図しつつ間接的な表現を用いている点に注目が集まり、直截的な非難・嘲笑の代わりにアイロニーを用いることによって、人間関係に深い亀裂を入れずに済むという主張およびその実証実験が進められた。これをポライトネス的観点と呼ぶとすれば、この観点において新たに考察の俎上に載せられたのは、〈対話者としての他者〉であった。

3. 言語の評価的側面

このように、アイロニー論は徐々にその力点を変えつつ発展してきた。それゆえ、先行研究への批判として提示された理論は、アイロニーをそれまでの先行研究とは異なった側面から捉えており、同じ土俵に載せて優劣を較べることができない場合も多い。しかし一方で、古代ギリシアから現在に至るまで、ほとんどすべてのアイロニー論で一貫して前提とされている共通事項もある。Garmendia (2010, 2018) はアイロニー論の先行研究を概覧し、重要とされる論文がいずれも、アイロニーの成立には否定的評価が必要である旨を述べていたことを整理しつつ提示した。実際に、否定的な評価であるという点が、ある発話がアイロニーであるために必要不可欠であるということは、主要なアイロニー理論の提唱者たち自身が認めていたことであった。グライスの理論によれば、アイロニーは否定的評価を伝えるための、本心とは反対の発言のことであった (Grice, 1975/1989, 1978/1989)。スペルベルとウィルソンによれば、否定的評価を伝えるための、先行する発話や一般的な期待の反復がアイロニーであった (Sperber & Wilson, 1981, 1986/1995)。また、クラークとゲリッグは、否定的な評価を伝えるための模倣をアイロニーと見做していた (Clark & Gerrig, 1984)。しかし、後継の研究者のみならず、その理論の提唱者自身でさえ、ときにその〈否定的な評価を伝えるための〉という限定に言及せずに理論を要約して提示した。その結果、「エコー」や「擬装」のような理論の表題ばかりに目が向き、否定的評価という側面について論じられることが少なくなった。

しかし、本稿ではガーマンディアの議論を踏襲しつつ、この否定的評価こそアイロニーがアイロニーたるために不可欠の前提であると見做す。実際に、否定的評価という点に言及せずにはアイロニーは説明しがたい。それは、この限定を取り払ったときの先行諸理論に瑕疵が見つかることから明らかとなる。たとえば、反義理論の例としてあげられるのは、そのほとんどが評価に関する命題である。したがって、(1a) を反転させた (2a) がアイロニーとなるのに対し、(1b) の反対命題である (2b) がアイロニーとして機能する文脈を想定することは難しい⁶⁾。

- (1) a. He is a fool.
- b. The sky is blue.

(作例)

- (2) a. He is a genius.
b. The sky isn't blue.

(作例)

つまり、反義理論は、あらゆる命題の反転をアイロニーだと見做しているわけではなく、〈否定的評価を反転させて言う〉場合のみをアイロニーだと捉えているのである⁷⁾。

次に、エコー理論においても、否定的評価は不可欠の要素である。それは、提唱者たち自身がそう断っている⁸⁾ことに加えて、その限定を取り払ったときのエコー理論は、アイロニー以外の表現も外延に含んでしまうことから明らかである。

- (3) a. Peter: Ah, the old songs are still the best.
Mary (fondly): Still the best.

- b. Peter: Ah, the old songs are still the best.
Mary (contemptuously): Still the best!

(Wilson & Sperber, 1992, p. 59)

(3a) と (3b) のうち、(3b) のみがアイロニーだと主張するためには、「軽蔑的に (contemptuously)」という部分が不可欠である。つまり、エコー理論の中核にも、否定的評価があることがわかる。

最後に、擬装理論については、否定的評価という基準を設けない限り、アイロニーにおける擬装と、演劇やものまねといったその他の擬装を区別できなくなる。演劇においては通常、演者は演技される対象に対して否定的評価を表現する意図はない。ものまねにおいては嘲笑の意図が含まれる場合も多いが、その場合の嘲笑の的は発話内容ではなく、真似される者のしゃべり方や口癖である。

以上、アイロニー論における主要な理論を概観してきたが、そのいずれにおいても否定的評価を婉曲的・暗黙裡に伝達することが理論の中核にあることが明らかとなった。このことから、アイロニーの定義は否定的評価という観点から案出されなければならないということが再認される。それゆえ本稿は、従来の言語学が主眼に置いていた言語の記述的 (referential) な側面に言語の評価的 (evaluative) な側面を対置し、後者における否定的評価の婉曲化をアイロニーの本懐として述定する。この区別により、Sperber and Wilson (1981) や Haverkate (1990) などによって指摘された、疑問文や感嘆文、一語文など命題的な文以外がアイロニーとして機能することもあるという事実についても、整合的な説明が与えられるようになる。

4. 共通基盤とアイロニーの手がかり

アイロニーの真のメッセージは字義通りの意味とは別のものであるという点もまた、先行研究のどの理論においても認められていることである⁹⁾。アイロニーはそれが非難や嘲笑であるという明白な証拠を残してはならないが、とはいえそれがアイロニーだと気づかれないのでは意味がない。そのため、話し手はアイロニーを述べるに際して、手がかりを付与する場合がある。たとえば、常識的にありえない内容を述べたり、抑揚に変化を施したり、表情その他の非言語的な情報を付与することがそれにあたる。つまり対話者間の相互理解の程度に応じて、手がかりの数と程度が調整される¹⁰⁾。

この相互理解に関しては、共通基盤 (common ground) という術語がしばしば使用される。Clark (2006) の簡潔な定義を引くと、共通基盤とは「人々が、彼らの内で共有されていると想定している情報の総体」(p. 105)¹¹⁾である。つまり、話し手が本当に言いたいことは字義通りのこととは異なり、その真意は非難・嘲笑であるという解釈の下で、発話はアイロニーとしての相貌を表わすのである。旧知の間柄でのほうがアイロニーが使用されやすい点が指摘されていることも、アイロニーの成立において共通基盤の参照が重要な役割を果たしていることの傍証となるだろう¹²⁾。

5. 態度衝突 (Attitude Clash)

アイロニー論において提示される例は、そのほとんどが状況説明とともに提示される。この事実は、不特定多数に対してアイロニーをアイロニーであると理解させるためには、共通基盤の存在が不可欠であることを意味している。したがって、状況説明抜きでアイロニーの核とされる一文のみを取り上げた場合、それが本音であるのか、お世辞であるのか、はたまたアイロニーであるかの判断を下すことは極めて困難である。ここで考えなければならないのは、Haverkate (1990) が提示する次の例である。

(4) I congratulate you on this stupid remark.

(Haverkate, 1990, p. 99)

(4) は、たしかに否定的評価を表現するにあたり、肯定的な表現 (“congratulate”) を用いており、その点だけ見ればアイロニーだと言ってよさそうである。しかし、この例は同時に、否定的評価 (“stupid”) を含んでおり、その点においては、否定的評価を直截的に表現していることになる。

この例をアイロニーに分類するかどうかは慎重に検討されなければならない。なぜなら、Barbe (1995) や Garmendia (2010, 2018)、Leech (1983, 2014) など下敷きに本稿が提起したアイロニーの定義は、アイロニーは婉曲的な表現であるというものであったが、仮にこのような、ポライトネスの観点における毀誉褒貶に関する表現の分類が妥当であるとするならば、(4) のように肯定的評価と否定的評価が共起している表現については、また新たな分類を考えなければならないためである。

本稿はこの種の表現をアイロニーとは見做さず、別の名を与えるべきだという立場を取る。用語に関しては、まさにこの、肯定的評価と否定的評価が共起している表現の呼称として、Leech (2014) が態度衝突 (attitude clash) という呼び名を与えており (p. 238)、本稿でもこれを踏襲する¹³⁾。なお、態度衝突は撞着語法 (oxymoron) のサブカテゴリーとも見做しうる¹⁴⁾。

アイロニーと態度衝突の決定的な違いとして、態度衝突には取り消し可能性 (cancellability)¹⁵⁾を認めたい点がある。通常、含意には取り消し可能性が認められるが、それはあくまで言語的に明示していないからこそであって、肯定的評価と共に否定的評価も明言している (4) に関しては、取り消し可能性は発生しない¹⁶⁾。たとえば、先に挙げた (4) について、以下のような再返答は妥当性を欠く。

(5) A: Do you mean I am stupid?

B: No way!

(作例)

もちろん、Bの弁論能力次第では、その後の弁解によってAの怒りを鎮めることができるかもしれない。しかし、(4)がAに対して侮辱的であったという点を覆すのは、極めて困難であり、また一般的でもない。

さて、見てきたようにアイロニーと態度衝突は一見類似している。それゆえに、態度衝突をアイロニーと見做す先行研究が多いのだろう。しかし、両者には取り消し可能性があるかどうかという違いがある。さらにもう一点差異を挙げるとすれば、アイロニーの発話内容は必ずしも賞賛的 (肯定的) なものとは限らないという点がある。態度衝突においては、両極の評価、すなわち肯定的評価と否定的評価の両方が明示されていなければならないが、アイロニーにおいて満たされるべき条件は、否定的評価を直截表現することを避けるということのみである。したがって、多くのアイロニーは評価を逆転させて、肯定的評価を表現するという方略をとるが、それ以外にも、疑問文にする、感嘆文にする、別の主題を取り上げる、などの方法によってもアイロニーの創出は可能である。約言すれば、態度衝突には肯定的評価が必要だが、アイロニーにおいては必須ではない。

6. アイロニーの諸機能

先に確認したように、アイロニーの発話においてなされているのは客観的な情報の伝達ではなく、評価の伝達である。特に、否定的評価を下すにあたっては、ポライトネスの観点からして直截的な表現が望ましくない状況がある。とはいえ、直截的な表現を避けながらゆえに、それを文字通りに受け取られてしまったのでは、評価の伝達には失敗してしまう。これらの両者を満たす、つまり否定的評価を相手に伝えつつ、参与者やターゲットのフェイスにも配慮した表現こそが、アイロニーであると論じてきたのであった。

アイロニーをこのように捉え直すことによって、アイロニーにおける難問のひとつである、なぜ〈貶すことによって褒める〉タイプのアイロニーより、〈褒めることによって貶す〉タイプのアイロニーの方が多いのかという問題にも説明が与えられる。否定的な評価を直截的に表現すべきでない状況は社会生活を営む上で多々あるが、反対に、肯定的な評価を直截的に表現すべきでない状況は稀である¹⁷⁾。つまり、賞賛を間接的に伝えなければならぬ状況がほとんどない結果、〈貶すことによって褒める〉タイプのアイロニーが少なく、アイロニーの非対称性が生じているのである。この説明は、エコー理論や擬装理論における非対称性の説明よりも妥当であると言える。なぜなら、この点についてのエコー理論の説明は、一般的な期待は肯定的なものであるため、それをエコーしようとするときアイロニーは肯定的な表現になりがちであるというものであったが、この理論ではわざわざ一般的な期待をエコーするという迂回路を取る動機が十分に説明できない。また、擬装理論も、あえて楽観的な人物を装う動機に関して説明に不十分な点が残る。

以上の点を踏まえると、アイロニーは参与者 (participants) 全員のフェイス (face) に配慮しつつ否定的評価を伝達する表現技法だと言える¹⁸⁾。ここで言う「全員」は、クラークの参与者役割の区分に従い、自己点検者 (speaker as self-monitor)、受信者 (addressees)、傍参与者 (side participants) に分けられる¹⁹⁾。また、それとは独立した役割として、アイロニーにはターゲット (target) が存在する。具体的に言うと、ターゲットは受信者であるのみならず、話し手自身であることもあれば、傍参与者であることもある。もちろんそれ以外にも、その場に居合わせない人がターゲットである場合もある。物や出来事がターゲットである場合もある。以下に考察していくのは、ターゲットでない場合の自己点検者、受信者、傍参与者それぞれに対してのフェイス保護と、ターゲットに対するフェイス保護である²⁰⁾。

話し手のフェイス保護

まず、話し手に関しては、直截的な非難・嘲笑の代わりにアイロニーで表現しているという点に、その人の冷静さや寛大さ、ひいては余裕をも認めることができる。なぜなら、狼狽することは、自らの弱みを晒し、事態に対処できていないという醜態を晒すことと同じだからである。例としては、Clark and Gerrig (1984, p. 123) が挙げる *A Modest Proposal* の例が、Muecke (1970/1982, p. 50) も認めているように、感じていることをそのまま口に出すことを自制した結果のアイロニーである。加えて、アイロニーは多くの場合ユーモアに富んでいると見做される²¹⁾。そのため、話し手は自分のユーモア精神に自己満足を感じることができるだけでなく、他者からもウィットに富んだ人物と見做される可能性が高まり、直截的に侮辱・嘲笑する場合に比べて、否定的評価を述べることによる印象悪化も軽減できる²²⁾。

さらに、先述の取り消し可能性も、話し手にとってアイロニーを用いるメリットであると言える。Dews et al. (1995) は、アイロニーは直截的ではないため、「それは悪意のある発言だ」という反論があった際に、それは聞き手の誤解であるとか、ただのジョークであるなどと責任逃れをすることができると述べている (p. 349)²³⁾。

受信者のフェイス保護

次に、ターゲットでない受信者のフェイス保護機能を考える。受信者は話し手への応答において、自身の否定的評価や話し手への反感を吐露せずに済むという点で、話し手のアイロニーから恩恵を受ける。たとえば (6) の例は、メアリーの発話がアイロニックであると説明されてきた。しかし、文脈によっては、ピーターの発話が既にアイロニーである場合もある。そのように仮定した場合、重要となるのは、(6) においては双方とも誰かや何かを悪く言うことを免れているという点である。一方で、(7) のように、もしもピーターがアイロニーではなく直截的に否定的評価を述べていたとしたら、受信者であるメアリーはどう返答するにしても、何かしらに対して否定をしなければならなくなる。

- (6) Peter: Ah, the old songs are still the best.
Mary (contemptuously): Still the best!

(Wilson & Sperber, 1992, p. 59)

- (7) a. Peter: Ah, the old songs are obsolete and boring.
Mary: I agree with you.

- b. Peter: Ah, the old songs are obsolete and boring.
Mary: I don't think so.

(作例)

(7a) において、メアリーはピーターに同意することによって、昔の曲を悪く言わざるをえない。あるいは、昔の曲への批判を抑えようとすれば、(7b) のようにピーターに反論をしなければならない。つまり、いずれの返答においてもメアリーは何かしらを否定しなければならず、その発話において何かしらの尊厳が脅かされることとなる。しかし、もしも (6) のようにピーターが表面上だけでも否定的な表現を避けていれば、メアリーがそれがアイロニーであると気づいたとしても、とぼけて同意したり、同調してアイロニーを述べたりすることができる。

この論点を Garmendia (2013) も踏まえつつ敷衍すると、以下のように一般化できる。アイロニーにおける暗黙裡の非難は、明示的な非難ではないがゆえに、含意に気づかなかったふりをするのが比較的容易である。対して、直截的非難に対しては、聴き取れなかったふりをするのはかろうじて可能だが、非難だとは思わなかったというふりをするのは不可能に近い。このように、意図を曖昧なままにしておくことで、参与者全員の体面が保たれる。つまり、お互いにとぼけながら否定的評価を受け渡すことができるという点が、アイロニーならではの機能なのである。

傍参与者のフェイス保護

次に、傍参与者について検討する。傍参与者に関しても、話し手や受信者の場合と同様のフェイス保護機能が働く。具体的に言えば、緩和機能やユーモア効果が働くことによって、場の空気がそこまで悪化しないことの恩恵を傍参与者も受ける。また、ターゲットの弁護や、話し手への反論の責務から免れることができるのは、受信者だけでなく傍参与者についても同じである。さらに、傍参与者は受信者と比べると、応答しなければならないというプレッシャーが少ないため、無責任にアイロニーを楽しむことができる。たとえば、レイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』にその典型的な例が見られる。ローリング医師はローリング夫人からの諫言に耳を貸さず、ウェイドが主催するパーティーで横柄な言動を繰り返していたため、参列者たちは眉を顰めていた。以下に引用するのはその場面でのやり取りである。

(8) She [= Mrs. Loring] turned her back on him. He [= Dr. Loring] reached suddenly and took hold of her arm. Wade took him by the shoulder and spun him around.

[Wade:] “Take it easy, Doc. You can’t win them all.”

[Dr. Loring:] “Take your hand off me!”

“Sure, just relax,” Wade said. “I have a good idea, Doctor. Why don’t you see a good doctor?”

Somebody laughed loudly.

(Chandler, 1953/1992, pp. 178–179, 下線は引用者)

ウェイドが直截的ではなくアイロニーを用いてローリング医師を非難することによって、その様子を周囲で見ている人たちはそのやり取りを面白がることができている。これがもし直截的な罵り合いになっていれば、仲裁に入らなければならなかったところであろう。

ターゲットのフェイス保護

最後に、ターゲットについて考える²⁴。ターゲットが聞き手である場合、一見するとアイロニーは攻撃的な言語表現であるように見える。とはいえ、伊藤・滝澤 (1994, p. 287) や Barbe (1995) が述べるように、アイロニーはターゲットのフェイスを保護する場合がある (p. 10)。なぜなら、直截的非難を言われた場合は、自身の名誉を回復するために反論せざるをえないのに対し、アイロニーの場合はその必要性が少ないからである。言い換えれば、アイロニーは不快なものをあえて直接的に取り上げないことによって、臭いものに蓋をし、互いに見て見ぬふりで済ませようという暗黙の了解を築くためにも用いられるのである。

ターゲットが自分自身である場合については、西村 (2015) や Ziv (1984) が論じている。西村 (2015) によれば、「自虐アイロニーとは、アイロニーの中でも、話者が話者自身の弱点を苛む形で用いるアイロニーのことである」(p.24)。そして、この「自虐アイロニーは、良い人間関係を保ち、円滑なコミュニケーションを継続するために「謝罪」「依頼・

確認」「場の空気の回復」の目的のもとで用いられる」(p. 39)。これは、心理学の用語でいう防衛機制であり、自身の尊厳が脅かされないよう、他人に尊厳を傷つけられる前に、先回りして自虐を述べているのだと説明しうる²⁵⁾。Ziv (1984) も、「もし自分の弱さを啜うことができれば、他者から啜われることを防ぐことができる」(p. 62)²⁶⁾と述べている。

自虐アイロニーが効果的に表現されている例として、次の(9)がある。主人公のマーロウは、朝起きたら戸口にピストルを持った顔面蒼白の友人・レノックスが立っているのを目にする。探偵という職業柄ピストルを見慣れているとはいえ、心中穏やかではない。マーロウはレノックスに軽口を叩きつつ、コーヒーを淹れて気分を落ち着かせようとする。その時のマーロウの心理描写が次の引用箇所である。

- (9) The coffee maker was almost ready to bubble. I turned the flame low and watched the water rise. It hung a little at the bottom of the glass tube. I turned the flame up just enough to get it over the hump and then turned it low again quickly. I stirred the coffee and covered it. I set my timer for three minutes. Very methodical guy, Marlowe. Nothing must interfere with his coffee technique. Not even a gun in the hand of a desperate character.

(Chandler, 1953/1992, p. 28, 下線は引用者)

“very”や“nothing”、あるいは“even”といった強調的な表現に、マーロウの強がりを見て取ることが可能である。また、それまでは“T”という一人称代名詞が用いられていたのに、後半“Marlowe”や“his”のように自身を客体化するような表現が取られている点にも注意を払いたい。ここには、一歩引いて事態を冷静に把握しつつ、余裕のある立ち振る舞いをして自身を落ち着かせようとするマーロウの思惑が透けて見える。このような、一歩引いてものごとを見ようとする姿勢と、狼狽を隠そうとする姿勢は、先に論じた通りアイロニーの特徴の一つである。

小括

以上見てきたように、直接的な非難・嘲笑の代わりにアイロニーを用いることで、参与者およびターゲットのフェイスが保護される。本稿はこの点をアイロニーの中心的な機能であると見做す。

もっとも、アイロニーの機能はこれだけに終始するわけではない。たとえば、Gibbs (2000) はアイロニー発話の際に不可欠である共通基盤の参照を通して、話し手と聞き手が互いをよく知っている関係であることが再確認され、連帯感を強化する場合があると指摘している。また、受信者がターゲットである場合にほとんど限定されるが、Leech (1983) は、アイロニーの発話は反論を封殺する機能があると述べている。話し手が周囲のフェイスに配慮した発言をしていることで、相手もまた公然とは反論しにくくなるというのがその理由である。また、伊藤・滝澤 (1994) も反論を封殺する機能について言及しているが、その理由づけはリーチとは少し異なる。伊藤・滝澤 (1994) によれば、ターゲットである聞

き手が、ある発話をアイロニーとして受け取るためには、話し手が心の奥底では否定的評価を抱いていることを推察しなければならない。しかし、それに思い至るということは、自分自身で自らの過失や至らなさに気づいているということになる。したがって、反論をすることにより、自らの体面を損ねてしまうことになるため、アイロニーに対する反論は良策とは言えないのである。さらに、Rorty (1989) は、ポストモダニズムの枠組みから、凡そあらゆる言説に対して、確固たる基礎を想定することを放棄し、基盤のない世界において自らもまた一箇所に軸足を据えることなく浮動するあり方をアイロニストの特徴として描き出した。この観点に先述の擬装理論を組み合わせつつ、Clark and Gerrig (1984, p. 123) が例に挙げているスウィフトの *A Modest Proposal*²⁷⁾ を捉え直すと、スウィフトのアイロニーはターゲットを擬装することでかえってその主張の荒唐無稽さを際立たせ、自壊に追いやる技巧だと見做すことができる。

7. 結論

アイロニーは単なる情報伝達ではない。それは、自他のフェイスに配慮した結果案出された、婉曲的な否定的評価伝達である。アイロニーは文脈によりさまざまな役割を果たしうるが、その中心に位置づけられるのはフェイス保護機能である。改めて本稿の議論から導かれるアイロニーの定義を述べると、アイロニーとは否定的評価を婉曲的に表現していると思われた言語表現である。

最後に、序論で列挙した問いに簡潔に回答する。〈なぜあえてアイロニーを言うのか〉〈なぜアイロニーには非対称性が存在するのか〉〈なぜアイロニーを言うにあたって、それがアイロニーだと明言してはならないのか〉の3つの問いに対しては、アイロニーは参与者やターゲットのフェイスに配慮した婉曲表現であるためだと回答しうる。直接的な非難・嘲笑の発話が忌避される状況で、それでもなお非難・嘲笑を表現したいとなれば、アイロニーを用いて婉曲的に表現せざるを得ない。そのため、アイロニーはそれがアイロニーであることを明言してしまえば本末転倒である²⁸⁾。また、賞賛を直截的に述べるべきではない状況は極めて少ないことから、アイロニーの非対称性が生じている。さらに、アイロニーが婉曲表現であるという議論を受け入れるのであれば、〈アイロニーは直截的な非難と比べてきつく感じられるのか、それとも批判の度合いを弱めるのか〉という問いに対しては、批判の度合いを弱めるという返答が与えられる。

言うまでもなく、本稿の定義はアイロニーの一側面しか捉えていない。より厳密な定義を与える上では、少なくともヴァイトゲンシュタインやアンスコムが議論している自他の非対称性を考慮に入れつつ、ミードの記号観やグライスの意味に関する一連の議論に即して意図の階層性を定義に組み込まねばならない。また、ゴフマンやクラークが議論している参与者役割の理論と、実際の発話の場の構成員を考慮に入れつつ、それらが発話の案出および聞き手の解釈に及ぼす影響についても、定義中で言及あるいは示唆しなければならない。その試みは、紙数にゆとりのある機会になされる予定である。

-
- 1) 「アイロニー」はしばしば「言葉のアイロニー (verbal irony)」と「状況のアイロニー (situational irony)」に大別される。本稿が扱うのは、言葉のアイロニーである。また、本稿が与えるアイロニーの定義は専門用語としてのアイロニーの定義であり、日常用語としてのアイロニーの定義ではない。
 - 2) 本稿では、「間接的」を直接的でないことと定義し、「婉曲的」を角が立たない遠回しな表現であることと定義する。また、漢字の表記について、「直接」は間に他のものが介在しないことを意味し、「直截」は表現が回りくどくなく率直であることを意味する。
 - 3) 以下、〈本心とは反対のことを言う〉を反義理論と略称する。
 - 4) Sperber and Wilson (1981) で提唱されたエコー的言及理論 (echoic mention theory) は、細微な変更を加え、後に提唱者たち自身によってエコー的解釈理論 (echoic interpretation theory) と呼び変えられた。しかし、Attardo (2000) や Kihara (2005) などが指摘している通り、その概要に決定的な違いはない。本稿では、あえてその点を区別せず、両者を「エコー理論」と総称する。
 - 5) 厳密に言うと、例外的に Brown and Levinson (1978/1987) や Leech (1983) は早くからアイロニーを對他関係の側面から論じていた。しかし、これらの著作が他のアイロニー論者に参照・言及されるようになるのは、主に 1980 年代後半以降であった。
 - 6) なお、“He is a fool” の〈反対のこと〉が “He isn't a fool” であるのか、それとも “He is a genius” であるのかという点もしばしば論点となるが、本稿では踏み込んだ議論はしない。アイロニーにおける〈反対〉の捉え方については、Giora (1995) を参照されたい。
 - 7) この点は Grice (1978/1989) の “I cannot say something ironically unless what I say is intended to reflect a hostile or derogatory judgment or a feeling such as indignation or contempt” (pp. 53-54) という記述からも明らかである。
 - 8) Sperber (1984) に、“verbal ironies are implicit mentions of meaning conveying a derogatory attitude to the meaning mentioned” (p. 131) との記載が、Sperber and Wilson (1986/1995) に “the attitude expressed by an ironical utterance is invariably of the rejecting or disapproving kind” (p. 239) との記載がある。
 - 9) Roy (1977) が提示する例 “I love people who signal” (p. 172) が反例となるのではないかの批判も考えられるが、この発話において話し手が本当に伝えたいメッセージは “I hate (or don't like) people who don't signal” であり、やはり真のメッセージと発話の字義通りの意味との間にはギャップがある。
 - 10) しかしこの「手がかかり」についても、論者により用語の選択や定義がさまざまである。大半のアイロニー論は、アイロニーの目印 (irony marker) かアイロニー信号 (irony signal) のいずれかを採用している。なお、手がかかりの種類については、Kreuz (2020)、Kreuz and Roberts (1995)、Attardo et al. (2003)、およびヴァインリヒ (1967/1973) を参照。
 - 11) 原文は “the sum of the information that people assume they share” (Clark, 2006, p. 105) である。この「想定 (assume)」という部分に関して、Clark (1996) からより詳細な説明を引けば、“*p* is common ground for members of C if and only if: (1) members of C have information that *p*, (2) members of C have information that members of C have information that *p*, (3) members of C have information that members of C have information that members of C have information that *p*, and so on ad infinitum” (p. 95. 引用に際して改行を削除した) となる。つまり、推測が入れ子構造を成し無限後退に陥る。
 - 12) Gibbs (2000) を参照。もっとも、これはアイロニーを言うかどうかの傾向であって、ひとたびアイロニーが発話されれば、それは近い相手以外にも十分ユーモラスに伝わる (Dews and Winner, 1995)。
 - 13) 定義は “an attitude clash is a case where the overt ‘polite’ meaning and the ‘impolite’ meaning of irony occur side by side in the same piece of language” (Leech, 2014, p. 238) である。また、日本語訳は Leech (2014) の邦訳として田中典子監訳のリーチ (2014/2020) が既訳として存在している。そこ

で用いられているのが、本稿でも便宜的に踏襲した「態度衝突」(p. 354)という訳語だが、これは概念の本質を捉えきれていない訳語だと言える。日本語の「態度」は「姿勢」や「向き合い方」の意で用いられることが多く、「衝突」は「意見の衝突」のように敵対関係を意味することが多い。したがって、その組み合わせである「態度衝突」は、考え方の違いから、ある人と別の人との折り合いが悪いという意味に捉えられかねない。原文を尊重しての訳出だと思われるが、意識を避けることでその用語が意味するところが見えにくくなっている。しかし、①評価に着目した近年のアイロニー研究においては、“attitude”と“evaluation”はしばしば置き換えられていること、②“clash”は「不調和」や「相容れないもの」のような意で用いられているため、「矛盾」や「撞着」という訳語が望ましいこと、③「矛盾」は多くの場合、論理的に相容れないことを指して用いられることが多いため、撞着語法という表現に用いられている「撞着」が最適であるという3点を踏まえ、ここで問題にしている概念を指す日本語訳としては「撞着評価」を推挙したい。

- 14) 撞着語法は、正反対あるいは対照的な意味をもつ言葉の並置であると定義される (Flayih, 2009, p. 31)。そのため、矛盾する評価的表現の並置 (= 撞着評価) のみならず、“cold fire”のような、記述的表現の対義結合も撞着語法に含まれる。むしろ、撞着語法の例としてあげられるのはしばしば後者である。しかし、Flayih (2009) には、撞着語法の例として“helpful useless”のような、アイロニックなものも挙げられている。Flayih (2009) は撞着語法の下位区分を整理しているが、その内の1つである主観的撞着語法 (subjective oxymoron) は撞着評価と極めて近い概念であり、“when the words are put together, a value, judgement or opinion about the quality of one of them is expressed” (p. 33) と定義されている。撞着語法は皮肉 (sarcasm) や諷刺 (satire) に利用されることがあるとの指摘もある (p. 35)。
- 15) “deniability”と表記されることもあるが、使用者の好みの問題に過ぎない。本稿では訳語に関しては既に“cancellability”の訳語として定着している「取り消し可能性」を便宜的に用いる。ただし、三木 (2022) の議論を踏まえると、アイロニーにおける含意の否認は、言い抜け可能性 (evadability) と呼ぶほうが適切である。なお、グライスは“cancelable” (Grice, 1978/1989, pp. 115–116) と、“I”の字を重ねずに綴っている。
- 16) 「含意を取り消すことができる」というのは、対話者が「それってこういう意味？」と訊ねてきた場合に、「いや、そういうつもりで言ったんじゃないよ」と否定することができるという意味である。もちろん、相手の質問を先取りして「○○のように聞こえたかもしれないけれど、そういう意味で言ったんじゃないよ」と取り消すこともできる。
- 17) もちろん素直になれず、つい憎まれ口を叩いてしまう場合などはあるが、それは社会的に望ましくないのではなく、個人の心理的・性格的な問題である。
- 18) もっとも、アイロニーについて、婉曲的であることによってターゲットのフェイス (face) を保護できているかという点について、そう簡単に結論を下すことができない部分もある。実際に、アイロニーの攻撃性については相反する実験結果が上がっている。アイロニーは直截的な非難・嘲笑よりも攻撃性が高いと感じられるという主旨の報告をしているものとして、橋元 (1989) や Colston (1997) があり、反対にアイロニーを用いると攻撃性が緩和されるという報告をしているものにも、Winner et al. (1988) や Dews et al. (1995)、Dews and Winner (1995)、Jorgensen (1996) などがある。これはあくまで代表的な研究のみの列挙であるが、仮にそれを以外をカウントした場合でも、アイロニーは攻撃性を弱めた非難・嘲笑であるという実験結果を得た研究の方が、反対の結果を得た研究よりも多い。
- 19) やり取りに参加している者のうち、話し手が直接語りかけている相手が受信者であり、周囲に居合わせる他のメンバーが傍参与者である。話し手は自分の発話を統制する必要があることから、話し手であると同時に自身の発話の聞き手でもある。これをクラークは自己点検者 (としての話し手) と呼ぶ (Clark, 1996, 1997; Clark & Schaefer, 1992)。
- 20) Garmendia (2013) は、アイロニーのフェイス保護機能を、話し手・聞き手の双方の立場から考察した数少ない文献の一つである (p. 228)。しかし、ゴフマンあるいはクラークによる参与者役割の観点は取り入れられておらず、話し手-聞き手の2者関係での考察にとどまっている点と、ターゲットを

参与者役割とは別立てで考えていない点において、改善の余地がある。

- 21) 多くの論者が指摘しているが、一例を引くと、Roberts and Kreuz (1994) が “speakers can be humorous by using hyperbole, irony, a simile, or an idiom” (p. 162) と述べている。
- 22) もっとも、直截的な非難も周囲からの高評価につながる場合がある。カール・シュミットなども述べているように、共通の敵を持つことで人々は連帯するためである。したがって、傍参与者や漏聞者 (overhearers) などの第三者をターゲットにした直截的な非難を述べることで、「普段言えないことを代弁してくれた」と好意的に受け取られる可能性はある。しかし、取り消し可能性を伴わない直截的な非難は、連帯感を生まなかった場合のリスクが大きい。したがって、どちらに転んでも損をしないという点において、アイロニーを使用するメリットは大きい。
- 23) もちろん、Garmendia (2013) も指摘しているように、文脈上アイロニーとしか解釈しようのない発話に関しては、取り消し可能性はほとんど認められない (p. 232)。
- 24) 先述の通り、ターゲットは対話者であるとは限らず、話し手自身や、その場に居合わせない人などであることもある。
- 25) このように言うことで、対話者からは「そんなことないよ」といった類の返答を引き出しやすくなる。ただし、西村 (2015) の実験結果によれば、防衛機制は自虐アイロニーの主たる目的ではない。曰く、「自虐アイロニーを用いると回答した母語話者に聞いたところ、彼らは自己防衛に重きをおいて自虐アイロニーを使用している訳ではないとの結果が出た。場合によっては少し自己防衛の機能を期待してはいるが、通常は寧ろ、場を和ませたり、聴者を笑わせたりすることを目指しているという」(pp. 32-33)。
- 26) 原文は “If a person can laugh at his own weaknesses, he prevents others from laughing at them” (Ziv, 1984, p. 62) である。
- 27) 正確な題は *A Modest Proposal For preventing the Children of Poor People From being a Burthen to Their Parents or Country, and For making them Beneficial to the Publick* である。ジョナサン・スウィフトによって 1729 年に執筆されたこの作品は、飢饉をしのぐために乳児を食料に用いてはどうかという荒唐無稽な提案を、真面目を装って語った作品である。
- 28) Barbe (1995) が第 8 章で議論している “to speak ironically” の例は、状況のアイロニーを記述する際に時折付与される表現なのであって、本稿が対象としている言葉のアイロニーと共起することは原則としてない。

参考文献

- Attardo, S. (2000). Irony as relevant inappropriateness. *Journal of Pragmatics*, 32(6), 793–826.
- Attardo, S., Eisterhold, J., Hay, J., & Poggi, I. (2003). Multimodal markers of irony and sarcasm. *Humor: International Journal of Humor Research*, 16(2), 243–260.
- Barbe, K. (1995). *Irony in context*. John Benjamins Publishing Company.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press. (Original work published 1978)
- Chandler, R. (1992). *The long goodbye*. Vintage Books. (Original work published 1953)
- Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge University Press.
- Clark, H. H. (1997). Dogmas of understanding, *Discourse Processes*, 23(3), 567–598.
- Clark, H. H. (2006). Context and common ground. In K. Brown (Ed.), *Encyclopedia of language and linguistics* (2nd ed., vol. 3, pp. 105–108). Elsevier.
- Clark, H. H., & Gerrig, R. J. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113, 121–126.
- Clark, H. H., & Schaefer, E. F. (1992). Dealing with overhearers. In H. H. Clark, *Arenas of language use* (pp. 249–274). University of Chicago Press.
- Colston, H. L. (1997). Salting a wound or sugaring a pill: The pragmatic functions of ironic criticism, *Discourse Processes*, 23(1), 25–45.
- Dews, S., Kaplan, J., & Winner, E. (1995). Why not say it directly?: The social functions of irony. *Discourse Processes*, 19, 347–367.
- Dews, S., & Winner, E. (1995). Muting the meaning a social function of irony. *Metaphor and Symbol*, 10(1), 3–19.
- Flayih, R. M. (2009). A linguistic study of oxymoron. *Journal of Kerbala University*, 7(3), 30–40.
- Garmendia, J. (2010). Irony is critical. *Pragmatics & Cognition*, 18(2), 397–421.
- Garmendia, J. (2013). Ironically saying and implicating. In C. Penco & F. Domaneschi (Eds.), *What is said and what is not: The semantics/pragmatics interface* (pp. 225–241). CSLI Publications, Center for the Study of Language and Information.
- Garmendia, J. (2018). *Irony*. Cambridge University Press.
- Gibbs, R. W. (2000). Irony in talk among friends. *Metaphor and Symbol*, 15(1-2), 5–27.
- Giora, R. (1995). On irony and negation. *Discourse Processes*, 19(2), 239–264.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In H. P. Grice (1989), *Studies in the way of words* (pp. 22–40). Harvard University Press.
- Grice, H. P. (1978) Further notes on logic and conversation. In H. P. Grice (1989), *Studies in the way of words* (pp. 41–57). Harvard University Press.
- 橋元良明 (1989). 『背理のコミュニケーション：アイロニー・メタファー・インプリケーチャー』. 勁草書房.
- Haverkate, H. (1990). A speech act analysis of irony. *Journal of Pragmatics*, 14(1), 77–109.
- 伊藤昭・滝澤修 (1994). 「対話のモデルに基づくアイロニーの一定式化」. 『人工知能』, 9(2), 283–289.

- Jorgensen, J. (1996). The functions of sarcastic irony in speech. *Journal of Pragmatics*, 26(5), 613–634.
- Kihara, Y. (2005). The mental space structure of verbal irony. In *Cognitive Linguistics*, 16(3), 513–530.
- Kreuz, R. J. (2020). *Irony and sarcasm*. MIT Press.
- Kreuz, R. J., & Roberts, R. M. (1995). Two cues for verbal irony: Hyperbole and the ironic tone of voice. *Metaphor & Symbolic Activity*, 10(1), 21–31.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. Longman.
- Leech, G. N. (2014). *The pragmatics of politeness*. Oxford University Press.
- リーチ, G. (2020). 『ボライトネスの語用論』, 田中典子 (監訳). 研究社. (2014 年初出)
- 三木那由他 (2022). 「言い抜け可能性と取り消し可能性」. 『大阪大学大学院文学研究科紀要』 62, 1–17.
- Muecke, D. C. (1982). *Irony and the ironic* (2nd ed.). Methuen. (Original work published 1970)
- 西村恵美 (2015). 「自虐アイロニーに関する一考察：その心理構造と本質的機能をめぐって」. 『英語学英米文学論集』, 41, 21–41.
- Roberts, R. M., & Kreuz, R. J. (1994). Why do people use figurative language? *Psychological Science*, 5(3), 159–163.
- Rorty, R. (1989). *Contingency, irony, and solidarity*. Cambridge University Press.
- Roy, A. M. (1977). Towards a definition of irony. In R. W. Fasold, & R. W. Shuy (Eds.), *Studies in language variation: Semantics, syntax, phonology, pragmatics, social situations, ethnographic approaches* (pp. 171–183). Georgetown University Press.
- Sperber, D. (1984). Verbal irony: Pretense or echoic mention? *Journal of Experimental Psychology: General*, 113(1), 130–136.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1981). Irony and the use-mention distinction. *Philosophy*, 3, 143–184.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed.). Blackwell. (Original work published 1986)
- ヴァインリヒ, H. (1973). 『うその言語学：言語は思考をかくす事ができるか』, 井口省吾 (訳). 大修館書店. (1967 年初出)
- Wilson, D., & Sperber, D. (1992). On verbal irony. *Lingua*, 87(1), 53–76.
- Winner, E., Levy, J., Kaplan, J., & Rosenblatt, E. (1988). Children's understanding of nonliteral language. *The Journal of Aesthetic Education*, 22(1), 51–63.
- Ziv, A. (1984). *Personality and sense of humor*. Springer Publishing Company.